

知的障害児通園施設における自閉症幼児の音楽リズム活動について
切り替え・同期・対人関係の構築の視点から

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター

子どもにとって音楽とはどのような意味を持っているのだろうか。梅本（1999）は、遊びの一種であり、コミュニケーションの一つであり、精神的栄養であると言っている。保育現場でも音楽という素材はよく使われている。特に、「リトミック」と呼ばれる音楽の力を利用して体を動かし楽しむ、「音楽リズム運動」が行われている。

自閉症児にとっても音楽の有効性は様々な研究で明らかにされている（加藤，1999；園田・平石，2002；松井，1989）。これらの研究により、音楽は自閉症児が困難さを持つ、模倣や対人関係の発達に影響を及ぼしていることが指摘されているが、「自閉症」という障害や生活年齢でひとくくりにされているため、その子どもが持つ発達のな力に焦点をあてた研究はあまりなされていない。また、「+」「-」という二分評価に留まり、その評価の持つ発達の意味については触れられていない。さらに、保育現場では、指導者が「音楽リズム活動」の意義について十分な理解がないことも考えられる。

そこで本研究では、自閉症児療育における音楽リズム活動の有効性やねらい、発達段階ごとに必要な療育者側の理解の仕方を検討し、療育活動に応用することを目的とした。そのために以下の2つを検討することとした。1つ目に、音楽リズム活動で重要とされる「切り替え」「同期」「対人関係の構築」の3点に着目し、その力を獲得するプロセスについて検討した。知的障害児通園施設H園に通う自閉症児6名を対象に、自然観察法によってビデオに記録し、分析した。期間は2004年11月から2005年9月までの11ヶ月間である。対象児6名を「可逆操作の高次化における階層-段階理論」(田中，1987)と、新版K式発達検査の結果から発達段階に応じて3つの群に分類し、群ごとの特徴とその考察を行った。2つ目に、1つ目で明らかになった結果から音楽リズム活動の課題ごとの特徴と各発達段階を照らし合わせ、課題の意味や役割について検討し、さらに各群の行動特徴から指導上の留意点について提案した。

切り替えの点で分析した結果、重度自閉症児に該当する 群は、3期に向かうにつれて、切り替えができるようになるものが増えた。 群では、求められた動きではなくても課題の変化を受け止め自分たちなりに表現することが増えた。中度自閉症児に該当する 群では、観察当初からほとんどの課題が切り替えできていた。しかし3期になると他者との関係づくりに気持ちが向くことで、切り替えができなくなったこともあった。切り替えができるということは、全体を感じ取ることから、次第に音の構造の細部に気づくようになるという音楽的な発達の順序をふんでいると考えられた。つまり、切り替えは同期の発達の

基礎にあるものであることが示唆された。

同期では、分析の結果からも適切な発達段階として、群以上の力が必要であることが示唆された。しかし群より発達的に未熟な・群の子どもたちにとって、「音楽リズム活動」が意味のないものではない。音が伴わない動作に比べ音を伴う動作の方が模倣しやすい(小塩・小宮, 1980)などの研究からも、音楽の力を利用することは身体運動を誘発し、一緒に活動に参加しやすいため、重要な意味があると考えられた。

対人関係の発達では、他者との関わり方のスタイルに着目した。その結果、自分から他者への関わりが多かった群に比べ、・群は他者からの関わりがほとんどで積極的な他者へのアプローチは見られなかった。しかし、他者からの関わりに無関心また拒否を示していた群では、回を重ねるごとに対応の変化が見られたことが明らかになった。

課題の分析では、困難な課題と比較的獲得しやすい課題にはそれぞれに特徴があることがわかった。獲得しやすい課題としては、発散的でエネルギーの高い課題や静的模倣課題が挙げられた。一方、困難な課題には、自閉症児が獲得しにくいとされている動的課題が多く、足首の調整が求められるものや継続性のある動きや、運動発達年齢が高い動きに関しては困難さが目立った。そのため、どの群でも獲得しやすい課題を常にプログラムに組み込めば達成感や一体感を味わうことは重要であると考えた。その反面群でもまだ困難な課題に対しては、今後その意味と狙いについて再検討する必要があるだろう。

最後に、子どもたちの行動特徴を捉え、指導を行う際に療育者が持つべき視点について提案した。「できる」「できない」という二分的な評価だけに捉われず、特に「できない」子どもの姿にはその背景にある発達的な課題や意味があることが示唆された。

自閉症という障害があり、生活のしづらさを抱えている子どもたちにとって、音楽という素材を利用したわかりやすい設定の下、生き生きとすることができるよう機会をできるだけ提供し、「楽しみながら」働きかけることができるよう、音楽リズム活動を保障していく必要があるだろう。

本研究では、自閉症という障害がある子どもを発達的な視点から分析し、その行動の理解を深めることはできたが、障害がない子どもの場合の発達的特徴や課題との比較が困難だった。音楽リズム活動におけるスタンダードな指標が不十分のため、発達的特徴であることと障害特徴であることとの違いを明確にできなかった。また、日常生活場面と音楽リズム活動場面の相互の関係性や影響がどのようにあったかは明らかにできなかった。これらの二点を今後の課題とし、研究していきたい。